

# 『世説新語』における王導の表現

渡邊義浩

## はじめに

『世説新語』は、南朝を代表する貴族である「琅邪の王氏」と「陳郡の謝氏」を比べる場合に、「陳郡の謝氏」を上置く傾向を持つ<sup>①</sup>。『世説新語』の執筆意図の一つが、桓温の篡奪を防いだ謝安は、いかにして貴族の自律的秩序を維持したのか、という方法論を後世の貴族に伝えることに求められるのであれば、当然のこととも言えよう。しかし、「琅邪の王氏」の中で、東晉の佐命の臣である王導だけは、好意的に描かれることも多い。

たとえば、『世説新語』賞譽第八に、「王公太尉を目すらく、巖巖として清峙し、壁立すること千仞たりと（王公目太尉、巖巖清峙、壁立千仞）」と、王導（王公）が王衍（太尉）を「目」（評価）したことを伝える。しかし、劉孝標注に引く顧愷之「王夷甫畫贊」では、目した主体は「識者」であって王導ではない。東晉の顧愷之が、王

『世説新語』における王導の表現

導を「識者」と一般化する必要はないので、『世説新語』が「識者」を王導に書き換えたと考えてよい。すなわち、『世説新語』は、王導が王衍の本質に迫る人物評価をした、と王導を宣揚しているのである。称えるだけではない。『世説新語』において、王導を取り上げる話数も、謝安・桓温に次ぐ三番目の多数に及ぶ。

なぜ、『世説新語』は、王導を多数、しかも多くの場合は好意的に取り上げるのであろうか<sup>③</sup>。本稿は、『世説新語』における王導の表現から、劉宋の劉義慶とその幕僚が描こうとした王導像を探究するものである。

## 一、寛と猛

王導は、太興元（三一八）年、元帝司馬睿を輔佐して東晉を建国したのち、從兄王敦の元帝期・明帝期と二度にわたる反乱を乗り越え<sup>④</sup>、成帝期には外戚の庾亮と共に輔政の地位にあった。その際の政

治方針の違いを示す両者の会話が、『世説新語』に伝えられる。

丞相嘗て夏月に石頭に至り、庾公を看る。庾公正に事を料らんとす。丞相云ふ、「暑し、小しく之を簡にす可し」と。庾公曰く、「公の事を遺るるは、天下も亦た未だ以て允しと爲さず」と。<sup>(5)</sup>

王導（丞相）は、暑い中、仕事に励む庾亮（庾公）に、少し「簡」であつてもよいではないか、と述べた。これに対して、庾亮は、王導に「事」を忘れすぎだと返したという。「簡」については、この話に続く王導の逸話に劉孝標の注がある。共に掲げよう。

丞相は末年、略ぼ復た事を省みず、正だ封録して之を諾す。自ら歎じて曰く、「人は我を憤憤たりと言ふも、後人は當に此の憤憤たるを思ふべし」と。

〔注〕徐廣の歴紀に曰く、「（王）導三世に阿衡たりて、夷險を経綸し、政は寛恕に務め、事は簡易に従ふ。故に遺愛の譽を垂るるなり」と。<sup>(6)</sup>

『世説新語』は、王導が晩年、具体的な事務をほぼ行わず、文書に封をしたまま良しとしていたと伝える。その注に引く徐廣の『歴紀』（『晉紀』か）は、王導が元帝・明帝・成帝の三代の宰相として、危険な国事を乗り切るために、「政」は「寛恕」・「事」は「簡易」、すなわち「寛恕・簡易」な政事を行つて、後世まで仁愛の譽を残した、と述べている。王導が庾亮に勧めていた「簡」とは、寛やかな、細部に拘らない政事のことである。<sup>(7)</sup>

これに対して、庾亮の政事は、王導の対極に位置するものであつた。

王導 輔政するに、寛和を以て衆を得たり。（庾）亮 法を任ひ物を裁き、頗る此れを以て人心を失ふ。<sup>(8)</sup>

庾亮のように法刑を重視して、国家権力の強化に務める政事は、後漢末から三國時代にかけて曹操や諸葛亮が『春秋左氏傳』を典拠に展開した「猛」政である。それは、後漢「儒教國家」の用いた豪族の規制力を發揮させる、『尚書』に基づく「寛」治が「慢」に流れた結果、弛緩した国家権力を再編するために用いられたものであつた。<sup>(9)</sup>東晉では、元帝司馬叡が、庾亮すら止めるほど法刑に傾斜した「猛」政を推進していた。<sup>(10)</sup>

庾亮は、妹の庾文君が明帝の穆皇后であり、成帝の外戚として、そして元帝の政策を継承する者としても、皇帝権力の強化に務める必要があつた。しかし、その「猛」政は反発を招く。王敦の乱の平定に功績のあつた蘇峻の軍勢力を削ぐため、建康に召還しようとした蘇峻に、祖約と共に反乱を起こしたのである。蘇峻は建康を占領し、成帝は幽閉された（『晉書』卷七十三 庾亮傳）。結論から言えば、徐廣の評価どおり、王導の「寛」治こそ、揺れる東晉を安定に導く統治政策なのであつた。

『世説新語』も庾亮の「猛」政に対して、徐廣と同様な評価をしており、庾亮の政治を塵を起こすと批判する王導の言葉を記している。

庾公は權重く、王公を傾くに足る。庾石頭に在り、王治城に在りて坐するに、大風あり塵を揚ぐ。王扇を以て塵を拂ひて曰く、「元規塵もて人を汙す<sup>けが</sup>」と。<sup>(11)</sup>

『世說新語』は、王導が「大風を起こして人々を塵まみれにする」と庾亮の「猛」政を批判した、と伝え、王導の「寛」治と庾亮の「猛」政を前者を評価する形で対照的に表現している。

それでは、王導の「寛」治とは、具体的にはどのような政事であろうか。

王丞相の主簿、帳下を檢校せんと欲す。公主簿に語るらく、「主簿と與に周旋せんと欲すれば、人の几案の間事を知らんと爲すこと無かれ」と。<sup>(12)</sup>

王導は、主簿が幕下の者を取り調べようとした際、人の机の中まで調べてはならないと伝えた、と『世說新語』はいう。部下を信頼して、監察をしない王導のこのような政治は、後漢「儒教國家」の「寛」治にも見られた。王導は、揚州刺史・監江東諸軍事として、司馬睿のもと本格的に揚州支配に乗り出す際、江東貴族を代表する顧和に、こうした「寛」治の推進を依頼されたという。

王丞相揚州と爲り、八の部從事を遣はして職に之<sup>お</sup>かしむ。顧和時に下傳と爲り、還りて時を同じくして俱に見ゆ。諸從事各<sup>お</sup>二千石・官長の得失を奏す。和に至りて獨り言無し。王顧に問ひて曰く、「卿何の聞く所ぞ」と。答へて曰く、「明公輔と作り、寧ろ網をして吞舟を漏せしむるも、何ぞ縁りて

風聞を採聽して、以て察察の政を爲さん」と。丞相咨嗟して佳しと稱す。諸從事自ら視て缺然なり。<sup>(13)</sup>

部郡國從事史（部從事）は、州に属する郡國の非法を挙げる監察官である。顧和がその派遣を批判する「察察の政」の典拠は、『老子』第五十八章である。王弼の注には、「刑名を立て、賞罰を明らかにして、以て姦偽を検す。故に察察と曰ふなり（立刑名、明賞罰、以檢姦偽。故曰察察也）」とあり、「察察の政」とは「猛」政のことである。そうした「猛」政を行うよりも、『史記』卷一百二十二酷吏列傳序を典拠とする「網をして吞舟を漏せしむ」政事、『史記正義』によれば、「法令」が「疏」となる政事、すなわち「寛」治を目指すことを顧和は王導に求めたのである。『晉書』卷八十三顧和傳も、これをそのまま採録しており、王導の「寛」治は、南人の顧和の思いに基づいている。それは、司馬睿の江東支配が、顧和の族叔である顧榮たちに支えられていたことを要因とする。

## 二、江東人士の登用

永嘉元（三〇七）年、東海王の司馬越より安東將軍・都督揚州諸軍事に任ぜられた琅邪王の司馬睿は、王導と共に建業に赴く。王導は、揚州を安定的に治めるため、江東人士を厚遇することを次のように勧めている。

（王）導因りて計を進めて曰く、「古の王者、故老に賓禮し、

風俗を存問し、已を虚くし心を傾けて、以て俊父を招かざるは莫し。況んや天下 喪亂して、九州 分裂し、大業 草創にして、人を得ることに急なる者をや。顧榮・賀循は、此の土の望なれば、未だ之を引き以て人心を結ぶに若かず。二子 既に至らば、則ち來らざるもの無し」と。帝 乃ち導をして躬ら循・榮の二人に造らしめ、皆 命に應じて至る。是れ由り吳・會 風靡し、百姓 心を歸す。此れよりの後、漸く相 崇奉し、君臣の禮 始めて定まる。<sup>(14)</sup>

王導は、江東を支配する要として吳郡の顧榮、會稽郡の賀循の二人を招くことを献策し、自ら二人を訪れて司馬睿政權に加入させている。これにより、東晉は建国の基礎を定めることができた。<sup>(15)</sup> 王導は、それを深く恩に着ていた。

顧司空 未だ名を知られず、王丞相に詣る。丞相 小や極れ、之に對ひて疲睡す。顧 之を叩會する所以を思ひ、因りて同坐に謂ひて曰く、「昔 元公の公が中宗を協賛し、江表を保全したるを追ふを聞く毎に、體 小や安んぜず、人をして喘息せしむ」と。丞相 因りて覺め、顧に謂ひて曰く、「此の子 珪璋特達にして、機警 鋒有り」と。<sup>(16)</sup>

まだ無名であった顧和（顧司空）は、疲れて居眠りしている王導（王丞相）を起こすために、顧榮（元公）から王導（公）が元帝司馬睿（中宗）を助けて江東を安定させた話を聞いた、と述べた。王導はハッと目を覺まし、その機知を「珪璋特達、機警有鋒」という

四字×二句の人物評価にして顧和を褒めた、というのである。王導が顧榮に対する感謝の念を強く抱いていたことが理解できよう。

『世說新語』は、この話の次に、同じく江東人士の賀循への評価を続ける。

會稽の賀生、體識清遠にして、言行 禮を以てす。徒に東南の美なるのみならず、實に海内の秀爲り。<sup>(17)</sup>

これに対して、唐修『晉書』卷八十三 顧和傳は、「珪璋特達、機警有鋒、不徒東南之美、實爲海内之秀」と、先に掲げた王導の顧和への四字×二句の評価に、『世說新語』に載せる賀循への六字×二句の評価を合わせている。

しかし、劉孝標注に、「爾雅に曰く、「東南の美なる者は、會稽の竹箭有り」と（爾雅曰、東南之美者、有會稽之竹箭焉）」と引かれる『爾雅』のように、「東南之美」という言葉は、「會稽郡」との関わりで使用するものである。したがって、『世說新語』のように、「不徒東南之美、實爲海内之秀」の六字×二句は「體識清遠、言行以禮」という會稽郡の賀循への評価と繋げる『世說新語』の方が正しい。<sup>(18)</sup> それを唐修『晉書』が誤って、王導の顧和への評価に加えていることは、この評価が王導によるものであったことを想定させる。しかも、「體識清遠、言行以禮」という四字×二句の人物評価は、王導が用いる形である。『世說新語』に載せられる賀循への評価は、王導のものである蓋然性が高い。

いずれにせよ、王導との関わりの中で、賀循の評価が記録される

ことは、王導の「寛」治が、江東人士に対する積極的な人物評価と拔擢を伴うものであることの証左である。

王丞相 揚州を拜するや、賓客數百人、並びに霑接を加へられ、人人に悦ぶ色有り。唯だ臨海の一客、姓は任、及び數胡人の未だ治がずと爲すもの有り。公便し還るに因りて、任の邊に到り過りて云ふに、「君出でなば、臨海便ち復た人無からん」と任大いに喜説す。因りて胡人の前を過りて指を彈きて云ふ、「蘭閣、蘭閣」と。羣胡同に笑ひ、四坐並な懼ぶ。<sup>(19)</sup>

王導は、揚州刺史になると、數百人の賓客をもてなし、満足させたが、不滿の色を浮かべていた任顗を人物評価で、そして胡族にも「蘭閣、蘭閣」と胡語で呼びかけ、喜ばせている。王導の政事が人事、とりわけ人物評価を重要視したことを窺い得る。具体的に王導は、次のような評価を江東人士に与えている。

會稽の虞駿、元皇の時に、桓宣武と同俠たり。其の人才理勝望有り。王丞相嘗て駿に謂ひて曰く、「孔愉は公の才有れども公の望無く、丁潭は公の望有れども公の才無し。之を兼ねる者は其れ卿に在らんか」と。駿未だ達せずして喪す。<sup>(20)</sup>

王導は、虞駿（會稽郡、虞翻の孫）は三公になる才と望を持つが、孔愉（會稽郡、武功で車騎將軍）は望に欠け、丁潭（會稽郡、吳の司徒丁固の孫）は才に欠けると述べた、という。こうした評価に基づき、王導は江東人士を政權に参画させていった。

とりわけ、廬江郡の何充には、高い評価を与え、自らの貴族社会

に迎えている。

何次道 丞相の許に往くに、丞相塵尾を以て坐を指し、何を呼びて坐を共にして曰く、「來れ、來れ。此こは是れ君の坐なり」と。<sup>(22)</sup>

何充が王導（丞相）のところに行くと、王導は塵尾で坐を指し、自分と一緒に坐らせた。共に坐ることは、自らの貴族社会に迎えることを意味する。しかも、劉孝標注が引く『晉陽秋』には、王導の妻の姉の子が何充に嫁ぎ、明穆皇后（庾后）の妹の夫であることが記される。身分制に基づく内婚制を取る貴族制において、婚姻関係を結ぶことは、何充が自分たちと同格であることを示す。大胆な南人優遇策と言えよう。

しかも、王導は揚州の官舎を何充のために修繕している。

丞相揚州の廨舎を治め、按行して言ひて曰く、「我正に次道の爲に此を治むるのみ」と。何少くして王公の重んずる所と爲り、故に屢々此の歎を發す。<sup>(23)</sup>

このように、將來を嘱望された何充は、王導の死後、錄尚書事に登り、康帝と穆帝の時には輔政として政權を支えていく（『晉書』卷七十七 何充傳）。ただし、その統治のあり方は「寛」治ではなく、懸命に自ら政務に向き合うものであった。そのため、清談に明け暮れ、政務に向き合わない北來貴族との間に、次のようなやりとりがあったという。

王・劉 林公と與に共に何驃騎を看る。驃騎文書を見て之を顧



みず。王 何に謂ひて曰く、「我今故に林公と與に來りて相 看る。卿 常務を擺撥し、應對して共に言ふを望む。那得ぞ方<sup>なん</sup>に低頭して此れを見るや」と。何曰く、「我 此れを看ざれば、卿 何を以て存するを得ん」と。諸人 以て佳と爲す<sup>(24)</sup>。

王濛と劉惔が支遁（林公）と共に何充（何驃騎）のもとを尋ねたが、何充は実務を止めなかった。実務を置いて共に語ろうという王濛に対して、「わたくしが実務を見なければ、君たちは存在できないではないか」と、何充は実務をせず清談に明け暮れる王濛に言い返した、というのである。なお、この話は、『晉書』卷七十七 何充傳には採用されない。『晉書』の描く何充像と『世說新語』の何充像とは異なるのである。『世說新語』は、貴族を代表する文化としての清談の重視と、南北問題を明確に描くという特徴を持つ。

北来貴族の頂点である王導に高く評価された南人の何充は、婚姻関係を結んで貴族社会に仲間入りを果たし、輔政の地位にまで登り詰めた。それでもなお、北来貴族が自らの貴族的価値観<sup>(25)</sup>において尊重する清談を重視することなく、実務に生きていった。そこに南北問題の象徴を見ることができる。

### 三、南北問題

南北問題とは、長江の北から江南に下ってきた北来の貴族たちが、江南の貴族・豪族を自分たちより劣るものとして、政治的・社会的

に差別することである。越智重明は、個人的には相互に尊敬し、親しんでいたとしても、北方出身門閥は、その政治的地位を確保する為には、南方門閥を抑制する立場を堅持せざるを得なかったとする<sup>(26)</sup>。これに対して、矢野主税は、個々の衝突はあったにしても、巨視的にみて東晉初頭の時代は最も江北人士と江南人士が融和的な時代であった、と主張する<sup>(27)</sup>。『世說新語』では、南北問題はどのように描かれているのであろうか。

張玄 王建武と先に相 識らず。後に范豫章の許に遇ふ。范二人をして共に語しらむ。張 因りて坐を正し衽を斂む。王 孰視すること良や久しきも對へず。張 大いに失望し、便ち去る。

范 苦に譬して之を留むるも、遂に住まるを肯ぜず。范は是れ王の舅なれば、乃ち王を讓めて曰く、「張玄は、吳士の秀にして、亦た時に遇せらる。而るに此に至らしむるは、深く解す可からず」と。王 笑ひて曰く、「張祖希 若し相 識らんと欲せば、自ら應に見詣すべし」と。范 馳せて張に報ぜしめ、張 便ち束帶して之に造る。遂に觴を擧げて對語し、賓主に愧する色無し<sup>(28)</sup>。

范寧（范豫章）の坐において、吳郡の張玄は、王坦之の子である王忱（王建武）に相手にされなかった。范寧が王忱を責めると、知り合いになりたいのであれば自分から訪ねて来い、と言った。それを伝えると、張玄は「束帶」して王忱を訪れた、という。北人の南人に対する差別意識と北人の知遇を得ようとする南人の努力がよく表現されている<sup>(29)</sup>。

このような南北問題の根底には、江南に在地性を持たない北人の喪失感、あるいは劣等感があり、それが南人への差別の背景となっていた。それは、そもそも東晉の開祖が口にしていたことでもあった。

元帝始めて江を過ぎ、顧驃騎に謂ひて曰く、「人の國土に寄り、心常に慙づるを懷<sup>おも</sup>ふ」と。榮跪對して曰く、「臣聞くならく、王者は天下を以て家と爲すと。是を以て耿・亳定處無く、九鼎洛邑に遷る。願はくは陛下遷都を以て念と爲すこと勿かれ」と。<sup>(30)</sup>

東晉の元帝司馬睿が顧榮（顧驃騎）に、「人の國土に寄」生することは恥ずかしいと言ったので、顧榮は、「王者は天下を以て家」といたしますと答え、殷と周の遷都の事例を挙げた、という。しかし、皇帝自らが江南に対して「人の國土」とする公言する感情は、西晉が曹魏を継承し、後に征服した孫吳を「南土」として差別してきた歴史に由来する。<sup>(31)</sup>

王導は、こうした北人貴族の喪失感を振り払い、東晉政權の基盤を確立して、可能であれば北伐により中原の回復を目指すべきことを口にしていた、と『世說新語』は伝える。

過江の諸人、美日に至る毎に、輒ち相邀<sup>むか</sup>へて新亭に出で、卉を藉<sup>し</sup>きて飲宴す。周侯坐の中ばにして歎じて曰く、「風景殊ならざれども、正<sup>ただ</sup>自ら山河の異有り」と。皆相視て涙を流す。唯だ王丞相のみ愀然として色を變じて曰く、「當に共に力

を王室に戮<sup>あは</sup>せ、神州を克復すべし。何ぞ楚囚と作りて相對するに至らんや」と。<sup>(32)</sup>

江南に移ってきた人々が酒盛りの最中、周顗（周侯）が山河の違いを言うと、みな涙を流した。そうした中、王導（王丞相）は色を変じて「楚囚」になるなど言い、「神州」すなわち中原の克復を説いた、というのである。中原の克復のためには、東晉の国力を増強させなければならない。そのためには江南人士の協力が必要不可欠である。

王導は、あくまでも華北の中原を「神州」と認識する者であった。それでも、懸命に江南に溶け込むために、文化の根底である言葉から、違いを取り除こうとしていく。

劉眞長始めて王丞相に見ゆ。時に盛暑の月なれば、丞相腹を以て彈棊の局に熨して曰く、「何ぞ乃ち洵なる」と。劉既に出席。人問ふに、「王公に見ゆるに云何<sup>いかん</sup>」と。劉曰く、「未だ他異を見ず。唯だ吳語を作すを聞くのみ」と。<sup>(33)</sup>

劉惔が初めて王導に会ったとき、王導は基盤に腹をおしつけ、なんと洵<sup>つめ</sup>たい、と言った。王導に会った感想を聞かれた劉惔は、「吳語」を話すただけ答えた、という。言語は、人々の差別を喚び起こす大きな要因である。唐の科擧で禮部試の後に行われた吏部試では、「身・言・書・判」によって貴族か否かを判断した。「言」（方言を使わないこと）は、貴族が文化を存立基盤とする以上、重要な必要条件であった。王導が「吳語」を用いることは、それ以外の言葉を

劉惔に発せさせないほどに衝動的なことであり、南北問題を解決しようとする王導の決意を象徴する。

こうして王導は、積極的に南人と交際し、かれらを自宅に泊めることもあった。

許侍中・顧司空、俱に丞相の從事と作り、爾の時已に遇せられ、遊宴・集聚、略ぼ同にせざるは無し。嘗て夜丞相の許に至りて戯れ、二人の歡極まる。丞相便ち命じて己の帳に入りて眠らしむ。顧は曉に至るまで回轉して、快執するを得ず。許は牀に上るや、便ち哈臺として大鼾す。丞相諸客を顧みて曰く、「此の中亦た眠るを得難き處なり」と。<sup>(34)</sup>

王導が義興郡の許璪（許侍中）と吳郡の顧和（顧司空）を自分の帳に入れて寝かせると、顧和は眠れず、許璪はぐっすり寝た、という。『世說新語』の主題は、義興の許璪の豪胆さを伝えることにあるが、行論との関わりで言えば、王導が、南人の二人を自分の帳の中で、しかも諸客のある中で就寝させるという恩恵を示したことが注目される。こうした王導による南北問題への対応の結果、王導と江南貴族との間には、次第に強い信頼関係が生まれていった。

王敦の乱が起ると、王導は闕に至って謝罪を繰り返した。属僚たちが、かける言葉も見つからない中、顧和は手紙を出して、その起居を問うた、という。

王敦の兄の含光祿勳爲り。敦既に逆謀し、南州に屯據するや、含職を委て姑孰に奔る。王丞相闕に詣りて謝す。司徒・丞相・

揚州の官僚問訊せんとするも、倉卒にして何をか辭とするを知らず。顧司空時に揚州別駕爲り。翰を授りて曰く、「王光祿は遠く流言を避け、明公は路次に蒙塵す。羣下寧からず。尊禮の起居何如なるかを審らかせず」と。<sup>(35)</sup>

王導を処罰せよとの意見もある中、王導がその地位を保ち得た要因の一つは、こうした江東貴族からの支持にあった。南土に恩愛を示してきた王導の南北問題への取り組みの成果と言えよう。

しかし、王導がすべての江東人士の支持を得られたわけではない。王丞相初めて江左に在り、援を吳人に結ばんと欲し、婚を陸太尉に請ふ。對へて曰く、「培塿に松柏無し。薰蕕は器を同じくせず。玩不才なると雖も、義として亂倫の始を爲さず」と。<sup>(36)</sup>

王導は、江南に渡ると「吳人」の援助を得るため、陸玩（陸太尉）に縁組を求めたが、「亂倫の始」にはなれないと拒否された、という「吳の四姓」の筆頭である陸氏は、西晉において北人からの差別の中で陸機を失っている。八王の乱の最中、南土の兵力を期待された陸機は、成都王穎に拔擢されて兵を委ねられる。しかし、陸機の指揮に従わない孟超に「貉奴が兵を指揮できるのか」と罵られ、孟超の兄である宦官の孟玖から讒言されて、七里澗の戦いの後、陸機は誅殺された（注(31)所掲渡邊論文参照）。その際、陸機と共に上洛していた顧榮たちは、すでに吳郡に戻っており、陸機にも帰ることを勧めていた最中に起きた悲劇であった。<sup>(37)</sup>

こうした事情もあってか、陸玩は、王導に政務の意見を求めなが



らも、それには従わなかった、という（『世説新語』政事第三）。あるいは、陸玩が王導のもとで、酪を食へ過ぎて死にそうになった話も伝わる。その際、陸玩は、手紙を書き、あやうく「傖鬼」になるところであったと記している（『世説新語』排調第二十五）。「傖」は、南方から北方を呼ぶ際の差別用語である。<sup>(38)</sup>このため、この話を引く『晉書』卷七十七 陸曄傳附陸玩傳は、「其の權貴を輕易すること此くの如し（其輕易權貴如此）」と陸玩を評する。王導の「寛」治にも懐かない南人は、存在したのである。

それでも王導は、南北問題の解決に目指した。それは南人の協力が必要れば、東晉が立ち行かないためである。

蘇子高の事 平らぎ、王・庾の諸公、孔廷尉を用ひて丹陽と爲さんと欲す。亂離の後、百姓彫弊す。孔慨然として曰く、「昔 肅祖 崩するに臨み、諸君 親しく御牀に升り、並びに眷識を蒙り、共に遺詔を奉ず。孔坦は疎賤にして、顧命の列に在らず。既に艱難有れば、則ち微臣を以て先と爲す。今 猶ほ俎上の腐肉、人の膾炙に任すがごときのみ」と。是に於て衣を拂ひて去る。諸公も亦た止めず。<sup>(39)</sup>

蘇峻（蘇子高）の乱のあと、王導・庾亮は、孔坦（孔廷尉）を戦乱に荒れ果てた丹陽の尹にしようとした。孔坦は、明帝（肅祖）の遺詔を受けた重臣でもないのに、艱難のときだけ先頭に立てようとすることはおかしい、と言って立ち去った、という。「會稽の孔氏」の出身である孔坦に、庾亮の「猛」政を理由に起こった蘇峻の乱で

荒廢した地域の行政をまかせ、言わば悪政のしわ寄せをしようとした王導や庾亮に対して、江東人士はこれを嫌ったことが分かる。しかし、だからと言って、南人が三公となることは、就任した南人当人を含め、居心地のよいものではなかった。

陸玩 司空を拜す。人有り之に詣り、美酒を索む。得れば便ち自ら起ち、梁柱の間の地に瀉箸し、祝して曰く、「當今才乏しく、爾<sup>なんど</sup>を以て柱石の用と爲す。人の棟梁を傾くること莫かれ」と。玩笑ひて曰く、「卿の良箴<sup>きん</sup>を戢<sup>とど</sup>めん」と。<sup>(40)</sup>

王導と距離をおいていた陸玩が、王導・郗鑒・庾亮が相繼いで世を去った後、司空を拜命すると、ある人が美酒を求め、これを地に注いで、今は才能のある人が少ないので、君が司空になった。「人の棟梁」を傾けないように、とお祝いを言った、という。陸玩が、預かるものは、あくまで他人、すなわち北人の国家の棟梁なのである。南人の力がなければ立ち行かない、北人の国家である東晉を象徴する逸話と言えよう。

北人と南人とは融和的である、という注(27)所掲矢野論文の主張は、南人が存在しなければ統治ができない東晉の実態を示した評価と言えよう。それでも、注(26)所掲越智論文の主張するとおり、南北問題は意識として明確に存在した。貴族が武力や経済力を基盤とせず、文化を存立基盤に置く以上、意識は大きな比重を占める。『世説新語』に北人の南人への差別が多く記される理由である。劉宋の貴族の現状を正統化する『世説新語』は、南人への差別意識を隠そ

うとはしない。そうした中で、王導は、南北問題の解決に努めた貴族として、『世説新語』から高く評価されているのである。

#### 四、貴族の模範

南北問題への解決の努力が王導への支持をもたらす一方で、王導は、北来貴族からその清談によって高く評価されていた、と『世説新語』はいう。

王丞相 江を過り自ら説くに、「昔 洛水の邊に在りて、數々裴成公・阮千里の諸賢と與に共に道を談ぜり」と。羊曼曰く、「人久しく此を以て卿に許せり、何ぞ復た爾を須ひん」と。

王曰く、「亦た我も此を須ふと言はず、但だ爾の時を欲するも得可からざるのみ」と。<sup>(41)</sup>

王導が、むかし洛水のとおりで、裴頠（裴成公）や阮瞻（阮千里）と清談したことを懐かしむと、羊曼は人々があなたを認めているのはそのことに依ると言った。王導はそのころに戻れないことを嘆いた、という。東晉において王導が有した求心力の淵源は、西晉期の清談にある、と『世説新語』は伝えているのである。

清談には、中心的な問題があり、そのいずれにも王導は、精通していた。

舊に云ふ、「王丞相 江左に過りてより、止だ聲無哀樂・養生・言盡意の三理を道ふのみ。然れども宛轉關生して、入らざる所

無し。<sup>(42)</sup>

「聲無哀樂」論・「養生」論・「言盡意」論の三論は、いずれも嵇康を中心とする魏晉玄學の展開の中心となったものである。<sup>(43)</sup> 嵇康の子である嵇紹は、早くから司馬睿の非凡さを見抜き、「琅邪王の毛骨は常に非ず、殆ど人臣の相に非ざるなり（琅邪王毛骨非常、殆非人臣之相）」（『晉書』卷六 元帝紀）と述べていた。王導は、その父である嵇康の論を尊重せざるを得まい。西晉が王衍の清談によって滅びたと「清談亡国論」が唱えられる中で、東晉の佐命の臣である王導が玄學に基づく清談の中核を継承していたことは、貴族における文化の重要性を端的に物語る（注② 所掲渡邊論文参照）。

こうして北来の貴族からも、南人からも支持を得ることで、王導は圧倒的な力を持っていた。しかし、王導が東晉の君主権力を脅かすことはなかった。

元帝 正會に、王丞相を引きて御牀に登らしむ。王公 固辭す。

中宗 之を引くこと彌々苦なり。王公曰く、「太陽をして萬物と輝きを同じくせしむれば、臣下 何を以て瞻仰せん」と。<sup>(44)</sup>

正會禮のとき、元帝司馬睿（中宗）から玉座に昇らせようとした王導は、これを辞退して、太陽と万物は輝きを同じくしてはならないと言った、という。王導は、玉座に昇るという殊禮を辞退すると共に、<sup>(45)</sup> 文化的諸価値を占有する支配者層である貴族と、民を把握し、武力を持ち国家権力の強大化を計る皇帝との違いを明確にし、それぞれの共存を目指したのである。王敦や桓温のように篡奪を目

指す貴族に対して否定的な『世説新語』は、王導を貴族の規範として高く評価する。

こうした王導の「寛」治は、謝安に継承された。

謝公の時、兵廝<sup>あつむ</sup>連亡し、多く近く南塘の下<sup>か</sup>の諸舫中に竄る。

或<sup>あるひ</sup>一時に搜索せんことを欲求するも、謝公許さず。云ふ、「若し此の輩を容置せざれば、何を以て京都と爲さん」と。<sup>(46)</sup>

謝安（謝公）は宰相のとき、亡命者を許している。劉孝標注に引く『晉陽秋』によれば、亡命者は山沢に隠れるものであり、異民族の侵入時に人心を動揺させるべきではないと考えた謝安が「寛」治を行ったのである、という。「寛」治は、莊園を持つ貴族・豪族の階級的利益を擁護するものでもあった。謝安が謝玄の指揮のもと淝水の戦いで苻堅を破ることができた一因は、謝安の「寛」治に対する南人の支持にある。

さらに、王導の「寛」治は、桓温への影響を見ることもできる。

桓公 荊州に在り、全て徳を以て江漢に被しめんと欲し、威刑を以て物を肅するを恥づ。令史 杖を受くるや、正に朱衣の上より過ぎしむ。桓式 年少<sup>わか</sup>く、外より來りて云ふ、「向に閣下より過ぎ、令史の杖を受くるを見るに、上は雲根を捎<sup>さ</sup>ち、下は地足を拂へり」と。意 著かざるを譏るなり。桓公云ふ、「我猶ほ其の重きを思ふ」と。<sup>(47)</sup>

桓温は、屬吏が罪を犯しても鞭打たない「寛」治を行った、という。屬吏層は、南人から辟召されており、それを罰しないことは、

南人の規制力を發揮させることに繋がる。桓温が北伐に成功して洛陽を回復し、土斷を実行して財政を確立した一因には、「寛」治<sup>(48)</sup>に対する南人の支持があった。

謝安・桓温は、ともに王導の「寛」治を継承することで、南人の規制力を發揮させながら、北方との戦いに臨んだのである。

## おわりに

王導は、元帝司馬睿や庾亮とは異なり、緩やかな「寛」治により江南を統治していた。それは、南人の顧和の思いに基づいたもので、王導は南人と婚姻関係を結び、南人の登用を図った。しかし、南人の何充が、輔政の地位に在りながら、なお清談よりも実務を重視したように、意識の上での南北差別は、明瞭に存在した。『世説新語』は、南北問題の存在を明確に描き、北人の南人への差別意識を隠そうとしない一方で、南北問題の解決に努めた王導を高く評価した。東晉そして劉宋の江南統治の模範をそこに見るためである。

『世説新語』は、王導の「寛」治が、江南を円滑に統治し、南北問題を解決する方法論として、謝安や桓温に継承されたことを伝える。それは、桓温の篡奪を防いだ謝安が、いかに貴族の自律的秩序を維持したのか、という方法論を伝えたのと同じように、『世説新語』が、王導の「寛」治を江南統治の規範として、後世に伝えようとしたためなのである。

注

- (1) 渡邊義浩『世説新語』の編纂意図(『東洋文化研究所紀要』一七〇、二〇一六年)を参照。
- (2) 渡邊義浩『世説新語』における人物評語の展開(『六朝學術学会報』一七、二〇一六年)を参照。
- (3) 『世説新語』輕詆第二十六には、王導が蔡謨を一方的に輕蔑した話を載せる。劉孝標注に引く『妒記』には、蔡謨が先に嫁を恐れる王導をからかったことを記すが、『世説新語』にはそうした記述はない。『世説新語』が王導に好意的とは言えない数少ない事例である。なお、『妒記』については、寧稼雨『中国志人小説史』(遼寧人民出版社、一九九一年)を参照。
- (4) 王敦の乱については、高須国臣「王敦の叛乱について」(『愛知大学文学論叢』三六、一九六八年)、唐長孺「王敦之乱与所謂刻碎之政」(『魏晉南北朝史論拾遺』中華書局、一九八三年)、陳啓雲・羅驥「社会名望与權力平衡—解説王敦之乱」(『史學月刊』二〇一〇—二〇一一年)を参照。
- (5) 丞相嘗夏月至石頭、看庾公。庾公正料事。丞相云、暑、可小簡之。庾公曰、公之遺事、天下亦未以爲允(『世説新語』政事第三)。
- (6) 丞相末年、略不復省事、正封錄諾之。自歎曰、人言我憤憤、後人當思此憤憤。〔注〕徐廣歷紀曰、(王)導阿衡三世、經綸夷險、政務寬恕、事從簡易。故垂遺愛之譽也(『世説新語』政事第三・注)。
- (7) 王導が江南に寛容の統治で臨んだことは、岡崎文夫『魏晉南北朝通史』(弘文堂書房、一九三二年)、万繩楠『魏晉南北朝史論稿』(安徽教育出版社、一九八三年)、寧稼雨『世説新語与中古文化』(河北教育出版社、一九九四年)、李濟滄「東晉貴族政治の本質—王導の「清浄」政治を中心として」(『東洋史苑』六二、二〇〇四年)など、多く指摘されている。
- (8) 王導輔政、以寛和得衆。(庾)亮任法裁物、頗以此失人心(『晉書』卷七十三 庾亮傳)。
- (9) 後漢の「寛」治、および曹操の「猛」政については、渡邊義浩「寛」治から「猛」政へ(『東方學』一〇二、二〇〇一年、『三国政權の構造と「名

- 士』汲古書院、二〇〇四年に所収)を参照。なお、『世説新語』政事第三には、簡文帝が丞相のとき、政務がたいへん遅れ、桓温が早くするよう勧めた話が記される。「寛」の悪弊として「慢」に政事が流れた事例である。
- (10) 『晉書』卷七十三 庾亮傳に、「時に〈元〉帝刑法に任ずるに方ひ、韓子を以て皇太子に賜ふ。〈庾〉亮諫むるに申・韓刻薄にして化を傷へば、聖心に留むるに足らざるを以てす。太子甚だ焉を納る(時〈元〉帝方任刑法、以韓子賜皇太子。〈庾〉亮諫以申・韓刻薄傷化、不足留聖心。太子甚納焉)」とある。こうした元帝の「猛」政への反発が王敦の乱を招いたことは、注(4)所掲唐論文を参照。
- (11) 庾公權重、足傾王公。庾在石頭、王在冶城坐、大風揚塵。王以扇拂塵曰、元規塵汙人(『世説新語』輕詆第二十六)。
- (12) 王丞相主簿、欲檢校帳下。公語主簿、欲與主簿周旋、無爲知人几案間事(『世説新語』雅量第六)。
- (13) 王丞相爲揚州、遣八部從事之職。顧和時爲下傳、還同時俱見。諸從事各奏二千石・官長得失。至和獨無言。王問顧曰、卿何所聞。答曰、明公作輔、寧使網漏吞舟、何緣探聽風聞、以爲察察之政。丞相咨嗟稱佳。諸從事自視缺然也(『世説新語』規箴第十)。なお、王導が江南大姓と結んだことは、陳寅恪「述東晉王導之功業」(『金明館叢稿初編』上海古籍出版社、一九八〇年)を参照。
- (14) (王)導因進計曰、古之王者、莫不實禮故老、存問風俗、虛已傾心、以招俊乂。況天下喪亂、九州分裂、大業草創、急於得人者乎。顧榮・賀循、此土之望、未若引之以結人心。二子既至、則無不來矣。帝乃使導躬造循・榮二人、皆應命而至。由是吳・會風靡、百姓歸心焉。自此之後、漸相崇奉、君臣之禮始定(『晉書』卷六十五 王導傳)。なお、王導がここに掲げる江東人士の登用方針である「存問風俗」に應えるため、葛洪が『抱朴子』を著したことは、渡邊義浩『抱朴子』の歴史認識と王導の江東政策(『東洋文化研究所紀要』一六六、二〇一四年)を参照。
- (15) 東晉の建国過程については、川勝義雄『六朝貴族制社会の研究』(岩波

書店、一九八二年）、金民寿「東晉政權の成立過程―司馬睿（元帝）の府僚を中心として」（『東洋史研究』四八―二、一九八九年）、田余慶「東晉門閥政治」（北京大学出版社、一九八九年）、田中一輝「東晉初期における皇帝と貴族」（『東洋學報』九二―四、二〇一一年）を参照。

(16) 顧司空未知名、詣王丞相。丞相小極、對之疲睡。顧思所以叩會之、因謂同坐曰、昔每聞元公道公協贊中宗、保全江表、體小不安、令人喘息。丞相因覺、謂顧曰、此子珪璋特達、機警有鋒（『世說新語 言語第二』）。

(17) 會稽賀生、體識清遠、言行以禮。不徒東南之美、實爲海內之秀（『世說新語 言語第二』）。

(18) 『世說新語』と唐修『晉書』との關係については、渡邊義浩『世說新語』の引用よりみた『晉書』の特徴（『史滴』三八、二〇一六年）を参照。

(19) 王丞相拜揚州、賓客數百人、並加霑接、人人有悅色。唯有臨海一客姓任、及數胡人爲未洽。公因便還、到過任邊云、君出、臨海便無復人。任大喜說。因過胡人前彈指云、蘭闌、蘭闌。羣胡同笑、四坐並懽（『世說新語』政事第三）。

(20) 會稽虞駿、元皇時、與桓宣武同俠。其人有才理勝望。王丞相嘗謂駿曰、孔愉有公才而無公望、丁潭有望望而無公才。兼之者其在卿乎。駿未達而喪（『世說新語』品藻第九）。

(21) 望については、中村圭爾「魏晉時代における「望」について」（『中国―社会と文化』二、一九八七年）を参照。また、會稽の孔氏については、李小红「六朝會稽孔氏家族研究」（『湖州師範學院學報』二四―五、二〇〇二年）を参照。

(22) 何次道往丞相許、丞相以麀尾指坐、呼何共坐曰、來、來。此是君坐（『世說新語』賞譽第八）。

(23) 丞相治揚州廨舍、按行而言曰、我正爲次道治此爾。何少爲王公所重、故屢發此歎（『世說新語』賞譽第八）。

(24) 王・劉與林公共看何驃騎。驃騎看文書不顧之。王謂何曰、我今故與林公來相看。望卿擺撥常務、應對共言。那得方低頭看此邪。何曰、我不看此、

卿等何以得存。諸人以爲佳（『世說新語』政事第三）。

(25) 『世說新語』に確立された貴族的価値観については、渡邊義浩『世說新語』における貴族的価値観の確立（『中国文化―研究と教育』七四、二〇一六年）を参照。

(26) 越智重明「南朝の貴族と豪族」（『史淵』六九、一九五六年）。越智重明「東晉の貴族制と南北の「地縁」性」（『史学雑誌』六七―八、一九五八年）、「東晉南朝の地縁性」（『The Oriental studies』一三、一九八四年）も参照。

(27) 矢野主税「東晉初頭政權の性格」（『社会科学論叢』一四、一九六五年）。このほか、矢野主税「東晉における南北人対立問題―その政治的考察」（『東洋史研究』二六―三、一九六七年）、「東晉における南北人対立問題―その社会的考察」（『史学雑誌』七七―一〇、一九六八年）も参照。

(28) 張玄與王建武先不相識。後遇於范豫章許。范令二人共語。張因正坐斂衽。王執視良久不對。張大失望、便去。范苦譬留之、遂不肯住。范是王之舅、乃讓王曰、張玄、吳士之秀、亦見遇於時。而使至於此、深不可解。王笑曰、張祖希若欲相識、自應見語。范馳報張、張便束帶造之。遂舉觴對語、賓主無愧色（『世說新語』雅量第六）。

(29) 『世說新語』賞譽第八に、西晉が孫吳を平定した前後に揚州刺史を勤めた汝南の周浚に、吳郡の蔡洪が、南人の人物評價を伝えた話が記される。劉孝標注に引く『蔡洪集』は、評価を伝えた十六人の名を挙げる。このように支配された側が、自らの「名士」社会の秩序を報告する事例は、曹操に袁氏が滅ばされた際の崔琰、蜀漢滅亡時の譙周にも見ることができる。

(30) 元帝始過江、謂顧驃騎曰、寄人國土、心常懷慙。榮跪對曰、臣聞、王者以天下爲家。是以耿・毫無定處、九鼎遷洛邑。願陛下勿以遷都爲念（『世說新語』言語第二）。

(31) 西晉において「南土」を代表する陸機が受けた差別とかれの生き方については、渡邊義浩「陸機の君主観と「弔魏武帝文」」（『漢学会誌』四九、二〇一〇年）、「西晉「儒教國家」と貴族制」汲古書院、二〇一〇年に所収）を参照。



(32) 過江諸人、每至美日、輒相邀出新亭、藉卉飲宴。周侯中坐而歎曰、風景不殊、正自有山河之異。皆相視流淚。唯王丞相愀然變色曰、當共戮力王室、克復神州。何至作楚囚相對邪(『世說新語』言語第二)。

(33) 劉眞長始見王丞相。時盛暑之月、丞相以腹熨彈棊局曰、何乃洵。劉既出人間、見王公云何。劉曰、未見他異。唯聞作吳語耳(『世說新語』排調第二十五)。

(34) 許侍中・顧司空、俱作丞相從事、爾時已被遇、遊宴・集聚、略無不同。嘗夜至丞相許戲、二人歡極。丞相便命使人已帳眠。顧至曉回轉、不得快孰。許上牀、便哈臺大軒。丞相顧諸客曰、此中亦難得眠處(『世說新語』雅量第六)。

(35) 王敦兄含爲光祿勳。敦既逆謀、屯據南州、含委職奔姑孰。王丞相詣闕謝司徒・丞相・揚州官僚問訊、倉卒不知何辭。顧司空時爲揚州別駕。援翰曰、王光祿遠避流言、明公蒙塵路次。羣下不寧。不審尊禮起居何如(『世說新語』言語第二)。

(36) 王丞相初在江左、欲結援吳人、請婚陸太尉。對曰、培塿無松柏。猶不同器。玩雖不才、義不爲亂倫之始(『世說新語』方正第五)。

(37) 渡邊義浩「陸機の「封建」論と貴族制」(『日本中国学会報』六二、二〇一〇年、「西晉「儒教国家」と貴族制」前掲に所収)を参照。

(38) 南朝と北朝がそれぞれ蔑称で呼び合いながらも、文化的には交流したところについては、吉川忠夫「島夷と索虜のあいだ―典籍の流傳を中心とした南北朝文化交流史」(『東方学報』七二、二〇〇〇年)を参照。

(39) 蘇子高事平、王・庾諸公、欲用孔廷尉爲丹陽。亂離之後、百姓彫弊。孔慨然曰、昔肅祖臨崩、諸君親升御牀、並蒙眷識、共奉遺詔。孔坦疎賤、不在顧命之列。既有艱難、則以微臣爲先。今猶俎上腐肉、任人膾截耳。於是私衣而去。諸公亦止(『世說新語』方正第五)。

(40) 陸玩拜司空。有人詣之、索美酒。得便自起、瀉箸梁柱間地、祝曰、當今乏才、以爾爲柱石之用。莫傾人棟梁。玩笑曰、戢卿良箴(『世說新語』規箴第十)。

(41) 王丞相過江自說、昔在洛水邊、數與裴成公・阮千里諸賢共談道。羊曼曰、人久以此許卿、何須復爾。王曰、亦不言我須此、但欲爾時不可得耳(『世說新語』企羨第十六)。

(42) 舊云、王丞相過江左、止道聲無哀樂・養生・言盡意三理而已。然宛轉關生、無所不入(『世說新語』文學第四)。

(43) 和久希「言盡意・言不尽意論考」(『中国文化』六六、二〇〇八年)、「言盡意・言不尽意論考―魏晉玄学とその周辺」(『筑波哲学』一六、二〇〇八年)を参照。

(44) 元帝正會、引王丞相登御牀。王公固辭。中宗引之彌苦。王公曰、使太陽與萬物同輝、臣下何以瞻仰(『世說新語』寵禮第二十二)。

(45) 国家の篡奪を志す者が、殊禮を繰り返し受けることで、帝位に近づこうとすることについては、石井仁「虎賁班劍考―漢六朝の恩賜・殊礼と故事」(『東洋史研究』五九―四、二〇〇一年)を参照。

(46) 謝公時、兵廝連亡、多近竄南塘下諸舫中。或欲求一時搜索、謝公不許。云、若不容置此輩、何以爲京都(『世說新語』政治第三)。

(47) 桓公在荊州、全欲以德被江漢、恥以威刑肅物。令史受杖、正從朱衣上過。桓式年少、從外來云、向從閣下過、見令史受杖、上捎雲根、下拂地足。意譏不著。桓公云、我猶患其重(『世說新語』政治第三)。

(48) 土斷については、矢野主税「土断と白籍―南朝の成立」(『史学雑誌』七九―八、一九七〇年)、「郡望と土断」(『史学研究』一一三、一九七一年)などを参照。